



名寄市立大学の窓から

知への誘い

vol.102



「教育は片思い」

保健福祉学部 社会保育学科 准教授 高島 裕美

私は現在、教育学関係の科目を担当しています。ここでは、学生たちがこれまでの学校教育経験を振り返った上で、「教えられる者から教える者へ」の移行を注意深く追求するというスタンスを重視しています。今回は、「教えられる者」と「教える者」この二つの立場のわかりあえなさについてお話しします。

教員養成校に通う大学生を対象としたある調査では、対象者に小・中学生時代を尋ねると、ほとんどが「学校が大好きだった」「先生のお手伝いをするのが好きだった」と回答したのだそうです。教員になる人は、そもそも学校が好き？…つまり面白い結果、そんなの当たり前か？…だと思われませんか？「子どもが好き」「学校が好き」な教育者はきつと、

「子どもたちは学校が好き」なはずだ「こんなことをしたら子どもは喜ばずだ」という考え、いわば希望的観測に基づいて子どもたちと関わりつとします。しかし大事なことは、教育を受ける側の子どもたちが、その予測どおりに行動するかどうか、です。思い通りになる場合もありますが、そうならなかった場合、子どもにウケないばかりか不信感を持たれてしまうかもしれません。受け手の子どもたちにも、意思や考えがあるのだということ。これは当たり前のことです。昔は私たちが自身も教育の受け手だったのに、このことを忘れてしまうものなのです。

たとえば教員側の「あなたのために思って言ってるのよ」「私は心を鬼にして言ってるんだ」という熱い気持ちには、必ずしも、子どもたちに素直に受け入れられるとは限りません。受け入れるかどうかを判断するのは受け手の子どもたちだからです。教員側は、自分の善意が必ずしも報われないというジレンマを常に抱えています。これを専門用語で「強権的善意」といいます。では、教員側と受け手とはどうすれば分かり合えるのでしょうか。教育社会学者の広田照幸さんは、『教育には何ができないか』という刺激的なタイトルの本を書いています。『教育には何ができないか』教育神話の解体と再生の試み

2003年、春秋社教育は、ともすれば不可能を可能にするようなパワーを秘めているように思われがちです。ですが彼は、教育には限界があると述べます。どんなに教員側がしっかりとした意図をもって、一所懸命に関わりつとしても、受け手のコンディションによっては、必ずしも効果に結びつかないどころか、「余計なお世話」になる可能性もあるのです。これを受けて広田さんは別の著作で「教育は片思いのようなもの」と表現しました。私はこの表現がとても気に入っており、次のように解釈しています。片思いとは、相手が自分のことを好きでも好きでなくてもかまわない、自分は好きだから、相手に好きになっても思えるように、見返りもなく思い続けること。もちろん心の奥では両想いになることを願いつつ。なんて尊い営みでしょう。しかし、「どうして好きになってくれないの」「自分がこんなに想っているのに」と言い出した途端に、教育はただの押し付けに、そう、ストーリーキングになってしまふのです。真の「片思い」として、自分自身も日々精進していきたいと思えます。

大学図書館へようこそ！

今年の夏は、酷暑・コロナ禍・クマ出没と三重苦ともいえる状況でした。やっと風が涼しくなってきた、読書の秋も間近ですね。名寄市のワクチン接種もかなり進み、今年度後半はどのような状況になるのでしょうか。図書館では、10日(金)にサイエンスカフェの開催もあります。感染対策をして、是非、ご来場ください。

【9月の開館について】

日曜日、祝日は休館です。
平日は午後9時、土曜日は午後5時で閉館です。



◆問い合わせ
名寄市立大学図書館

01654@7671(直通)
ncu_library@nayoro.ac.jp

大学図書館にはこんな本があります ～「知」への誘い～からもう1歩～

今回原稿を執筆した高島裕美先生が、本文にも取り上げている本を中心にご紹介いたします。

『教育原理 保育実践への教育学的アプローチ』
ひろた てるゆき しおさき みほ 広田 照幸・塩崎 美穂/編著 樹村房
→教育の難しさを、子どもや時代に責任を押し付けるのではなく、もっと別な見方を。

『教育には何ができないか ー教育神話の解体と再生の試み』
ひろた てるゆき 広田 照幸/編著 春秋社
→教育を蘇生させたいと教育本来の意義と限界を問う。

『教育問題はなぜまちがって語られるのか？「わかつたつもり」からの脱却』
ひろた てるゆき いとう しげき 広田 照幸・伊藤 茂樹/共著 日本図書センター
→教育問題をナナムから見る「ハそまがりのすすめ」のような本。